

第40回 特攻平和観音年次法要

9月23日 世田谷山観音寺

報 特 攻

平成4年1月

第14号

〒102 新
 東京都千代田区九段南
 4-3-7 勸修行社内
 特攻隊慰霊顕彰会
 特攻平和観音奉賛会
 電話 03(3263)0851
 編集人 田中賢一
 発行人 田最上賢一

毎年秋の彼岸の中日に行う年次法要も、回を重ねること四十となった。3年度も世田谷山観音寺と我が会が共催して、9月23日午後2時より遺族、戦友等約四〇〇人が参列して行はれた。気つかはれた台風も南西方面に停滞しており、当地は秋晴のよき日、役員の老兵達は早朝より準備が忙しかった。

法要は国歌斉唱に続き観音寺太田賢照山主の願文、浅草寺貫主壬生台舜大僧正以下式衆の読経が流れ、その後寺崎隆治副会長の祭文奏上、遺族代表本間嘉男殿（海上挺進第28戦隊長本間俊夫殿令兄）、戦友代表吉岡忠一海軍中佐がそれぞれ追悼の辞を捧げた。なお竹田会長は健康を害され、今回は欠席された。

また本年もトルコ大使館付武官テキン・キャル海軍中佐が、追悼の辞を日本語で述べた。

そのあと献吟及び海軍軍装ラッパ隊の儀仗が行はれた。一行の姿は懐旧の情切々たるものもあるも、自衛隊の儀仗が参加できないのは、まことに遺憾千万である。この法要も観音寺では永続させられるであろうが、現在の顔振れでいつまで行えるのか、行先を思えば暗澹とならざるを得ない。



寺崎副会長祭文奏上

特攻慰霊の歌 新巻銀河同人

森 武次

平成三年度特攻観音慰霊祭に出席して
 回護る猛き心の極まりて炎と化りて神
 上りたり
 烈燭と建御雷の命かや融決し立ち給う
 と
 うつそみを玉串として捧げしを史に見
 ざれば戦き止まず
 新妻を都辺遠く残し置きリンガエン沖
 深く沈みき

（注）海上挺進第28戦隊長高橋功に捧ぐ
 特攻の神も下りて的む宴精気溢れて薫
 風の吹く

目次

特攻観音年次法要	1
特攻を支えた魂	生田 博 4
神風特攻隊編成の真相	
伏龍特攻と私	吉岡忠一 9
特攻隊の遺書	石野 博 10
ある老婦人からの手紙	少飛会 16
感銘を覚えた意見発表	
特攻観音合祀者名簿の再調査終る	20
九つの江を叩く	窪川敏郎 22
「各グループの慰霊祭と会合」	
船泊特幹二期14、特潜15、	
特操20、空挺21、菊池会24、	
特操一期会24	



第40回特攻平和観音年々法要
におけるトルコ武官あいさつ

私は駐日トルコ大使館付武官デキン・キヤル海軍中佐であります。私は昨年8月、日本に着任しましたが、この一年間に勉強した日本語で、こあいさつ申し上げます。

本日は第10回特攻平和観音年次法要にご招待いただき、このようなスピーチの機会を与えられまして、たいへん光栄に思っております。

トルコには、国家に殉じることができざる者は、前世においても来世においても、それが成就可能な者であり、三世の功德があるという言い伝えがあります。

日本にもトルコにも、祖国や愛する人々を護るために、勇敢に戦って散華された、多くの英雄の歴史がありまます。これらの偉いきせいによって、われわれは国家を維持し、日常生活を楽しむことができるのであります。

私が考えますのに、日本には現在の平和が、特攻隊員などの尊いきせいによってもたらされたということ、認識していい人が多くいようであります。

本日ここにお集まりの特攻隊員の遺



族や友人の皆さんは、この偉大な特攻隊員の功績ときせいの精神を、永く後世に伝える義務と責任を持っておられると思います。

今や世界は大きく変わろうとしております。このような時にわれわれは、日本の特攻隊員が世界史に残した意義を再認識するとともに、その遺徳を顕彰し、その精神を継承することを英霊の前に誓い申し上げまして、私のつたないこあいさつを終る次第であります。

(文責・上坂 康)



木立に曳るる秋の陽に
流るる流経の声浸みて
世田谷の杜に魂呼ぶか
鐘の音浄く漂いぬ
嵐に向い身を捨てし
特攻烈士の一念は
なんぞ違はん世を救う
大慈悲心の観音よ
酒杯重ねしかの友よ
我は残りて老醜の
身を盃前にぬかつけば
明眸皓齒君か影
後に続くを信ずると
遺せしあの日の一言を
徒にはせなじ現世に
語り伝えん志



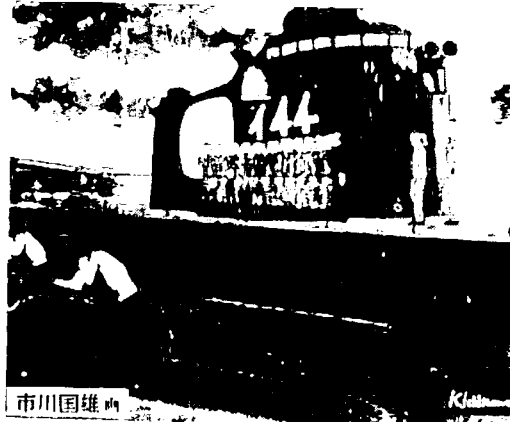
松本武仁西



本年は顕彰会員の生田博、市川国雄、伊藤直之、松本武仁、西野弘二、中野友次郎の特攻に因む油絵が観音寺本堂の欄干に展示された。



西野弘二西



市川国雄西



高瀬 武甫

木洩れ陽に読経流れて森静か
みたま鎮まる平和観音

国護るみたまを永久に安らげく
世田谷山に守り祭らん

暖かき母の御胸に抱かれよ
遠き海越え空飛びて来よ

特攻観音四十回法要に臨み
賦して奠る

今村 浩

観音廟上頌声隆んなり
四十回を重ね特攻を悼む
遺族老兵皆席に列し
香を拈み黙禱し純忠を憶う

臨特攻観音

四十回法要賦奠

観音廟上頌声隆

四十重回悼特攻

遺族老兵皆列席

拈香黙禱憶純忠

特攻を支えた魂

生田 惇

一月十七日 中東に戦争が勃発し、私はテレビの前にくぎづけにされてしまいました。戦闘機から放たれた爆弾に映し出された目標に爆弾が吸い込まれるように命中してピンポイントの目標を破壊してゆくのです。これならばイラク国内の軍事施設は遠からず破滅して多国籍軍は絶対的な優位に立つだろうと思ったことでした。

この爆撃を見て、私は大東亜戦争末期の特攻隊のことを思い出しました。このように爆弾に目玉がついていて、敵艦に命中させるような技術が日本にあったなら、陸海軍航空合わせて4千人を超えるような特攻戦没者を出さずにすんだであろうに、と思ったのです。皮肉なことにこれらの誘導装置には、日本の電子部品が多く使われていると言ふことです。

先の大戦末期、日本でも目標に対する自動誘導装置が研究されていましたが、なかなか実用の段階には至りませんでした。そこで必死必殺の体当たり攻撃が比島作戦の時から採用される事になりました。しかし、この攻撃を実行すれば必ず死ぬのでありまして、命する者も、命ぜられる者も大変な覚悟と苦悩を必要とします。実行する者としては、その覚悟の上に更に強い精神力が必要とな

ります。特攻隊員が訓練の指針とした「特攻隊必携」には「最後まで照準せよ、目をつむるなかれ、目をつむれば命中せず」とあります。大戦末期日本の飛行機の性能は米軍機のそれに劣りました。それに整備も思うに任せぬ状態です。その飛行機で重い爆弾を積み、航続距離の限界を超えて目標付近まで進出し、敵戦闘機の攻撃をかわし、下から吹き上げて来る猛烈な弾幕の中を突進するのは、その突進角が浅すぎると敵に打ち落とされ易く、効果も少ない。深すぎると速度が大きくなりすぎて、舵が利かなくなりす。ですから、適切な位置に占位して、定められた速度と角度で突進しなければなりません。そして、目をつむるなかれ、目をつむるなかれ」となる訳です。特攻隊員が任務を達成する為には、死への覚悟とともに、強い精神力、高い技術力が必要であったのです。

テレビを見ていて多国籍軍の高い技術力には敬服しますし、あれだけの作戦を間断なく実行する強い精神力にも驚きを覚えます。しかし、死への覚悟についてはいかがでしょうか？もしその覚悟が十分な作戦であれば、もっと速やかに戦争を終息させ、一般民衆に対する損害はもっと軽くて済んだのではないかと思われま。しかし国の危急を救う作戦と、被侵略国を解放する作戦では全く意味が違いますから、そのような事を考えるのは無理かもしれません。航空特攻作戦と多国籍空軍の作戦の決定的な違いはこの辺にあるように思えます。

最近の事です、佐賀県の鳥栖小学校の体育館

に眠っていた古いグラランドピアノが永久保存にされる事になりました。塗装も落ちてははや正常に奏することも出来ないほどに年をとったピアノです。昭和二十年五月のある日、二人の青年将校がこの学校を訪ねてきました。「自分達は上野音楽学校ピアノ科出身の学徒出身兵であります。明日特攻出撃することになりましたが、学校を出て今日までピアノの演奏会に参加する機会がありませんでした。勿論、祖国の為に命を捧げる事は本懐ですが、今生の思い出に思い切りピアノを弾いて二人だけの演奏会をやりたいのです。目達原の基地からあちらこちらとグラランドピアノを求め歩いて、やっとこの小学校にたどりつきました。どうぞお願い致します」。

上野訓導の暖かい許しに、二人はピアノの前に進みました。やがて、ベートーベンのピアノソナタ「月光」の清らかな調べが校舎に流れ始めました。いつの間にか二十人程の学童が集まってこの演奏に聴き入っていました。やがて帰隊の時刻も迫ったころ、上野訓導は二人に向かって「行り難うございました。こんな素晴らしいピアノを何年ぶりかで聴かせて頂きました。この子供達もあなた方のお姿と一緒に今日の演奏を忘れる事はないでしょう。明日はいよいよご出発とのことですから、お別れにこの子供達と『海行かば』を合唱してご武運を祈らせていただきます」

送別の合唱が終わって、この少尉は「この戦争はいつかは終ります。しかし今自分達が死ななければ、この国をこの子たちに残すことは出来ないのです」と言い残し、りりしい後ろ姿をみせて立

ち去つたと言つて事です。

翌日の午前、鳥栖小学校の上空に現れた一機の飛行機が何回も大きく翼を振りながら、南の空へ消えて行きました。それから四十五年あまり、残念ながらこの二人の少尉の名前とその後の消息は今日に至るまで特定出来ません。(特攻隊慰霊顕彰会機関紙 特攻から)でも、子供達は決してそのことを忘れていないのです。山下千江さんは次のように歌っています。

だから少女は、その海をみない
初めて心を結びあつた

背すじの スラリとした青年の
若い生命が沈んでいる海

燃える火をかばいあつて
愛することの喜びと

離れてゆく悲しさに 胸をひたし
ひき裂かれていった その頃の青春

だから少女は、その海に行かない
戦いが過ぎて

戦いを知らぬ 青年と少女が
裸でたわむれる その海へ

海の底には青年の眸がある
水色のリボンで結んだ 少女の髪を

しっかりと胸の内ポケットに秘めて
国を守るのだと 沈んでいった青年の

瞳が

死を賭けて国を守るといふことは、こういう事であろうと思うのです。特攻戦没した方は航空関係でおよそ四千柱ですが、水中・水上特攻を含めると六千柱のおおきにのぼります。もとより大東

亜戦争二百万の戦没者の偉業も重大事でありますが、特攻作戦が「命令による組織的な体当たり」という非常な作戦であったことから特に特攻戦没者に思いをいたす訳であります。この人達の念じたように、我々は生き残り、日本は平和と繁栄の中にあります。この国はこの人達が命を賭けてもまもりぬいた、尊い国であります。ですから我々も、この国の平和と独立を守る為には命を賭ける程の覚悟と気概を持つべきであると信じています。

2

靖国神社遊就館の第9号室、そこは特別攻撃隊の顕彰室に充てられています。ここに特別攻撃隊の頌と文章が銅板に刻み込まれています。いま特攻を支えた魂をさぐる為、この文章を引用したいと思います。

特別攻撃隊の頌

わが国が存亡をかけた大東亜戦争においては、開戦当初から生還を期すことのない特攻作戦が決定された。

弱冠十七、八歳から三十歳代までの勇士が肉親への愛着を断ち切り、洋々たるべき人生を捨てて、空に、海に、陸に、決然として肉弾攻撃を敢行し、偉大な戦果を挙げ、ことごとく散華された。その数およそ六千柱。壮烈無比なこの攻撃は敵の心胆を寒からしめ、国民はひとしくその純忠に感泣した。

特別攻撃隊の戦闘は、真に至高至純の愛国心の発露として国民の胸奥に生き続け、また世界の人びとに強い感銘を与え、わが国永遠の平和と発展の礎となっている。ここに心から愛惜の情をこめ

て特別攻撃隊の諸史料をこの遊就館に納め、その精神と偉業とを後世に伝える。

昭和六十年十二月八日

特別攻撃隊慰霊顕彰会

会長 竹田恒徳

戦後、占領軍の命により先の大戦を大東亜戦争と呼ぶことを禁止されました。東洋の共存共栄を国是とする戦争目的を否定されたのであります。

歴史家は東京裁判の判決の線に沿って日本の歴史を根本から書き直してしまいました。日本は侵略国家であったと決め付けられたのです。現在東京裁判の不当を知る人は少なくありませんが、残念ながら東京裁判史観で歴史を習った人々の心の中からの史観を拭い去ることは難しいように思えます。靖国神社がいまだに国家から正当な取り扱いは受けていない事からも、そのことが立証されます。しかし、当時の日本国民の歴史観は違いません。当時の軍部や政治家に行き過ぎや判断の誤りがあった事については否定しません。しかし、日本国民は日本の歴史と持来を信じ、精一杯に生きてきたのであります。大東亜戦争は、東洋を列強の支配から解放して共存共栄の実を挙げようとするいわば正義の戦いでありました。この故に、日本国民は一億一心となって戦争に従い、特攻隊員はその正義を信じて敵艦に体当たりしたのであります。二人だけのピアノ演奏会をするような心優しい若者が、それを信じることなくしてどうして自ら進んで敵艦に体当たりするような事が出来るのでしょうか。「頌」では、この辺りの消息を深い

思いを込めて「わが国が存亡をかけた」と表現してあります。

開戦当初、真珠湾攻撃に赴いた特殊潜航艇隊は「特別攻撃隊」と名付けられました。一般に特別攻撃隊と言えば、昭和十九年十月、大西提督が決意し、閑行男大尉が陣頭に立った神風特攻隊を始めとしていますが、特別攻撃隊慰霊顕彰会で出版した「特別攻撃隊」ではこの事から書き起こしてあります。それは大東亜戦争開幕から特攻精神で戦闘が貫かれていたことを訴えたかったからであります。事実人間魚雷である「回天」、海上特攻の「震洋」「海上連絡艇」も航空特攻以前に研究開発されたものであります。殊に海軍においては、これらの研究が初級士官の発意によって具体化され、その熱意に上司が動かされて実行に移された事実は、注目に値します。

陸軍航空の場合、事情は深刻でした。戦局が深刻になるにつれて艦船に対する攻撃が、重大問題になりました。しかし、制空権の獲得と地上作戦協力を目的として錬成された陸軍航空には、艦船攻撃の能力が低いのです。艦船攻撃を成功させるには、もっと大きい航続力が必要ですし、艦船撃沈に十分な重い爆弾を必要とします。それに艦船の発見識別、攻撃方法の訓練をしなければなりません。陸軍でも艦船攻撃の重要性を認識して、急いでその研究訓練を始めたのですが、それで不十分と考えた陸軍は大型機の体当たり部隊として万葉・富嶽兩隊の編成を比島作戦に先立って進めました。この隊員は絶対の成功を期する為に、技量の優秀者が充てられました。

ところが、神風特別攻撃隊の成功に刺激された陸軍でも、特別攻撃隊編成の機運が一気に高まりました。飛行学校で教育を終わらせたばかりの学生が、その教官に率いられて特攻攻撃に赴いたのである。今、艦船に対する攻撃法は習得した。俺の腕には国民が赤誠を込めて作り上げてくれた飛行機がある。この困難を救うのに、この俺がやらなければ誰が出来るか。若者たちはそう考えたのでしよう。かくて、弱冠十七、八歳から二十歳代を主とする特攻隊員が出陣することになったのです。そのころの思い出を高橋圭子さんは次のように書き留めています。

——国防、すなわち家族への愛と、あるがままに信じていたあのころ、散華することに短い青春の総決算を賭けて悔いなかった若者の魂を、理屈なしに懐かしみ、もう一度逢いたいと思う、それだけで精一杯の思いなのです。

「お兄さん」と呼んだあの方たちの倍も生き、人の親となり、生後間もない長男を逝かせてみると、その昔、いとしい子を国に捧げた、お父さま、お母さまのご心中、ただただ察するにあまりがあります。……

散った桜は 花吹雪

弥生の空を 舞うさまに

若き御霊を 偲ぶかな

散ったつばみの いとおしさ

わが手のひらに 温めて

心の園に 咲かすかな

純真な少年でした。そして才能豊かな健康な青年たちでした。多くはまだ恋愛も経験したことの

ない若者です。親ならずとも「わがてのひらに温めたい」ほどにいとおい、あまりにも若い命でありました。

特攻隊員の中には三十歳代で亡くなった方があります。その方たちは教官で、若い特攻隊員の攻撃を成功に導く強い責任感からその先頭に立たれたのです。第四十五振武隊長に藤井一中尉という方がおられます。この隊長は、教え子だけを死なせてはならないことを堂々家族にも語っていられたらしく、この固い決心が実を結んだと知った奥さんは、夫を励ますためやはり死を選び「お先に行っておりますから心置きなく戦って下さい」と遺書をのこし、三人の子供に晴れ着を着せて荒川の露と消えました。昭和十九年も暮れようとする冬の初め、早や熊谷の原野に霜柱の立つころでした。

陸軍航空特攻戦没者のなかに、十数名の朝鮮人がある事が注目されます。当時朝鮮は日本に組み込まれてはいましたが、彼らにとって祖国はやはり朝鮮であり、パイロットになる程の人は朝鮮でもエリート中のエリートであります。その人たちが、なぜ特攻という凄まじい死を選んだのか。その事は十分に考えなければならぬと思います。今となつては、彼らの心情を正確に述べることは出来ませんが、次の事は事実として伝える事が出来るのではありますまいか。即ち、すべて不屈の意思の持ち主であったことと、操縦技術の錬磨に不断の訓練を怠らなかつたことの二点であります。そして朝鮮の文明に対する誇りをもち、日本の統治下にありながら大和民族に遅れはとらぬと

する気概があつたように思われます。そして又、日本の若者の間に伍して、日本の歴史的立場の正当性を信じるようになったのかも知れません。

このように考えて参りますと、特攻を支えた魂は根本的には、至高至純の愛国心と言うことになろうかと思ひます。その愛国心は、国の歴史と將來に対する信頼と誇り、そして家族・同胞に対する愛から生まれるものと信じられます。そして若者達を特攻に駆り立てたものは国の存亡に關する危機感であります。それを実行に移させたものは、俺がやらねば、という男としての誇りと責任感であつたであろうと思ひます。特攻は、任務遂行の一般概念を超えた究極的な任務遂行の様態であります。そのために国民はひとしくその純忠に感泣し、今に至るまで、それを知る人達の心の中にその面影が生きて続けているのだと思ひます。

3

沖繩作戦での特攻戦没者は、3340名であります。このうち航空特攻は陸・海軍合わせて2818名で、全体のおよそ85%にあたります。その戦果は、アメリカの海軍作戦年誌によりますと、撃沈36・撃破366となっております。この外陸軍の舟艇、イギリスの軍艦に与えた損害も少なくないのであります。いい忘れましたが、特に海軍では一機に搭乗している人員が多いので突入の機数は海軍102機、陸軍82機、合計184機です。一隻に多数機が突入した例も多いのですからおよそ25%が突入に成功した事になり、当時としては驚異的な成功率といえます。第二次世界大戦全期間を通じ、アメリカ海軍の損害の80%がこの期間に集中している事

からも、また精神的な脅威を与えたという点からもその戦果は偉大であつたのであります。

御参考までに、陸軍の沖繩航空特攻で亡くなつた方々の出身を述べておきます。現役特攻では、士官候補生69 少尉候補者13 計82名 予備役特校では、特別操縦見習士官23 幹部候補生75 計98名 特校の総計は140名であります。現役下士官では、少年飛行兵32名 下士官73 計105名 予備役下士官では養成所出身者91名 下士官の総計では149名になります。これを合計致しますと、889名と言ふことになります。

特校と下士官の人員が大体同じであります。パイロットの人員構成は大体特校1対下士官3の割合でしたから、特校が率先して先頭に立つたと言えるとおもひます。注目すべきは、特校の80%が予備役特校であつたことです。この人達はいわゆる学徒出身でありまして、軍人たることを人生の目標としたものでは有りません。当時の大学進学率は今日程大きくありません。当時の大学進学率は日本社会のエリートたるべき人達であつたのであります。頗りに述べられていきますように、まさに洋々たるべき人生であつたのであります。それがベンを捨てて操縦機をとるようになった動機について十分に考えられなければならぬと思ひます。下士官の主力は、少年飛行兵であります。この人達の国を思う純真さと飛行操縦者としての誇りは、今日の老境に至るまで続いています。通信省の航空機乗員養成所は民間機の操縦者を養成する教育機関でした。この戦死者は下士官戦死者の20%であります。操縦教育終了者の絶対数が少

なかつたからでありまして、操縦技量については、少年飛行兵に劣らぬという自負を持っていました。このような人員構成から考えてみましても、先に述べましたように、特攻を支えた魂の根本は愛国心であり、それは国の歴史と將來に対する信頼と誇り、家族・同胞にたいする愛から生じていますし、それを実行に移させたものは、男としての責任感と誇りであつたと觀察されます。

いずれに致しましても、誇りなくして自ら死地に赴くことは出来ないであろうと思ひます。何が彼に誇りを持たせるのか、その点が重大問題であります。

ここで沖繩で決行された他の特攻に就いても触れておきたいと思ひます。海上特攻として海軍の震洋、陸軍の連絡艇があります。海軍では15名が、陸軍では145名が亡くなつています。ともに長さ5.5m幅1.7m位のベニヤ板製ボートで、速度は20ノットあまりであります。ただ陸軍の方が走行距離を犠牲にして速度と安定性を多少重視しているように見受けられます。その性能の關係から攻撃目標は上陸用船艇に限られる訳であります。海軍は撃沈1を、陸軍は撃沈9・撃破4の戦果を挙げています。陸軍が海軍よりも多くの戦果を挙げるといふ不思議な現象ですが、海上挺進隊の錬成に当たられた方に聞いて見ましたら、「連が良かったからだろう、しかし下士官に歴戦者が多く、適切なゲリラ的攻撃が頻りに出来たからかもしれない」と言っておられました。海上挺進隊員の主力は、中学校高学年から軍に入った特別幹部候補生であります。

回天 は、一人乗りの人間魚雷であります。直径1m・長さ14.5m、潜水艦に6基搭載します。速度30ノットで23〜78キロの走行距離がありますが、これは酸素と灯油を混焼して魚雷の走行距離を伸ばしたものです。この作戦で亡くなった方は39名、10隻の軍艦を撃沈？ しています。大変効率のよい攻撃で、潜水艦が目標を発見し艦長が発進を命じます。回天は潜望鏡で視認追跡して突入するのですが、それまでの泊地付近の攻撃では空海の警戒が厳重でなかなか成功しませんでした。沖繩では洋上で待ち伏せ攻撃をした為に大きな戦果を挙げることが出来ました。

特潜は、潜水艦に搭載する豆潜水艦であります。比島作戦ころからは、ディーゼルエンジンを備えて自力航行出来るようになりました。直径2m、長さ25m程度で乗員は、3〜5名です。沖繩戦には11隻が参加して76名の方が亡くなりました。残念な事に相次ぐ空襲の為に5隻が事前に沈没し、沖繩戦で攻撃に参加したのは6隻であります。戦果は撃沈2隻でした。戦果が思うに任せなかったのは、敵の警戒が厳重であつたうえに水中速度が6ノットの低速であつた事に原因があつたかも知れません。

義烈空挺隊の戦死者は113名であります。しかし残念ながら途中で撃墜されるなどして、沖繩北飛行場に突入したのは10名足らずに過ぎません。しかしこの人達の活躍で、飛行場は九二日も制圧されてしまったのです。私は、この人達の訓練の様子を見ましたが、その迅速、正確、静粛なること、正に神業でありました。人間も訓練によつ

て、このような成果を挙げられる事に深い感銘を覚えたものであります。

冷静に攻撃成功・不成功の原因を分析してみますと、第一に、目標発見についての情報を得難い兵器及びその運用では、成功を期しがたいことでもあります。次に、目標に至る機動力が攻撃成功に欠かせません。これは速度と航続距離が大きな要素です。最後に、敵の防衛網の突破能力です。これは、戦場に於ける生き残り能力と言ひ換えても宜しいかとおもいます。航空を初めとする各種特攻を比較して、攻撃成功の秘訣は、情報力・機動力・生き残り能力の三ツを兼ね備える事であらうと思ひます。最後に、攻撃の破壊力は強力である事を必要とします。航空特攻での撃破数は36隻のおおきにのぼっていますが、爆弾の破壊力が十分でなかった為に撃沈に至らなかったものであります。命を賭けて敵艦に突入した特攻隊勇士にとつて、これほど残念な事はないと思ひます。

ともあれ、これらの特攻兵器は若い士官の間で創案され、上司を説得してその協力によって具体化しました。燃えるような科学技術への探究心、困難に打ち勝つ不屈の魂が新しい特攻兵器を生み出して行きました。しかし資材の欠乏と時間の不足によって、その兵器は十分なものではありませんでした。若者たちは、必死の訓練によってそれを補いつつ戦場に臨んだのであります。

敗戦後、日本は深刻な困難に見舞われました。しかし世界を相手に死を賭けて戦つた不屈の魂は、平和の裡に生きつづけ、戦後の多くの困難を乗り切らせました。そこには、多くの幸運の助け

があつたのでありますが、今にして思えば歴史の必然のようにも感じられます。大東亜戦争時の兵器は、総じて連合軍のそれに劣りました。そのため多くの特攻隊を生む事になつたのであります。その間に日本は次第に農業国から工業国に変貌して行きました。指に血をにじませながら飛行機の生産に携わつていた少年は、やがて世界に誇り得る品質の工業製品を生み出すようになっていきました。特攻時代から求め続けた科学技術の進歩への姿勢が、今日の日本の繁栄を築いたのであります。このような事実を踏まえ「頌」では、「わが国永遠の平和と発展の礎となつている」と表現してあります。

特別攻撃隊戦没者は大正デモクラシーをおう歌する時代にうまれました。親たちは、生まれ出たこの子が、いつまでも平和に、健やかに育つことを願つて名付けたのでしよう。特攻戦没者の名を書き連ねる度にそう思うのです。現在の日本も真に平和であり、経済的繁栄をおう歌しています。私達の子供を再び特攻の時代に生きさせるような事をしてはなりません。

現在の経済的繁栄は、自国の安全を他国に委ねる無責任に甘んじ、実利的な物欲を追求した結果であるとも言えましょう。文化がらん熟し、国民精神に健全さを失つた国家は必ず滅びることを、古代からの歴史は物語っています。私は特別攻撃隊の魂の根源を探る作業を通じ、国民精神の健全さと、価値判断の適正さを求めることができたと、その事のみを祈念するものであります。

神風特攻隊編成の真相

元第一航艦第二十六航戦先任参謀

吉岡 忠一

今次大戦において我が国は米國と開戦残念乍ら降服に終わった。

そしてその理由をミッドウェイの敗北にありという人あり、航空機が弱くなった為めという人あり、ハワイの奇襲作戦をやったからと論ずる人がある。海軍の戦史をよく研究しておる人程そんなことをいう。

私は日本の敗戦は国力、軍事力の強大な米國と戦争をしたからであると思ふ。

昭和19年10月19日第一航艦長官大西瀧治郎中将がマバラカットに到着した。午後5時頃、クラーク航空基地に進出していた私に、マバラカットの二〇一空の本部に来るようとの命令があった。二〇一空は第一航艦所屬の戦闘機部隊であった。直ちに本部の会議室に入った。参加者は次の七名であった。

司令長官、大西瀧治郎（海兵10期）
中将

一航艦 参謀 猪口力平（海兵52

期）中佐（のち大佐）

“ 副官 門司親徳

（短現）主計大尉（の

ち少佐）

二六航戦参謀 吉岡

忠一（海兵57期）少佐

（のち中佐）

二〇一空副長 玉井浅一（海兵52期）中佐（のち大佐）

飛行隊長 指宿正信（海兵65期）大尉（のち少佐）

“ “ 横山岳夫（海兵67期）大尉

大西中将は次のように申された。

「今度の捷一号作戦に失敗すれば、それこそ由々しい大事を招く。従って一航艦としては、是非とも、栗田艦隊のレイテ突入を成功させなければならぬ。そのためには少くとも、一週間ぐらい、敵空母の甲板を使えないようにする必要がある」。

「またその為めには零戦に二五〇キロの爆弾を抱かせて体当たりをやる外に確実な攻撃方法はないと思うが、どんなものだろうか」

大西中将は既に第一回（昭和12年4月10日 航本教育部長、大佐のとき）米國と戦争したら必ず負けると言つた。第二回（昭和16年9月29日・第十

一航艦参謀、少将のとき）米國と戦争したら必ず負けると言つた。

第三回（昭和19年10月19日・第一航艦長官のとき）捷一号作戦に失敗した

ら由々しき大事を招くと言われたが、

当時の戦況を挽回しようなどとは絶対に考えていなかったと思う。栗田艦隊

のレイテ突入を成功させ、何とかして

一度でもよいから敵の上陸部隊を追い

落す。そして和を申し出す機会を捉え

ることを考えておられたようであつた。

その言葉の中に、一週間ぐらい敵空母の飛行甲板を使えないようにするとあることから、特攻々撃実施期間を、栗田艦隊レイテ突入成功迄の約一週間と限定して決心されたと拝察する。

10月19日、二〇一空の零戦兵力は僅か二六機、搭乗員で伎倆優秀なものは殆んど戦死し体当りする外に敵の飛行甲板を使えなくする方法はない。

「特攻隊員は志願で行く。志願による特攻攻撃の外に確実な方法はないと思ふが、どんなものだろうか」と大西中将は総てを玉井副長に任せられたのである。

そこで、玉井副長は、大西中将に中座を申しいで、先任飛行隊長指宿大尉と別室で協議し「体当たり攻撃の編成は全部航空隊にお任せ下さい」と答申し、この歴史的打合せは終わった。

二〇一空は全搭乗員特攻攻撃を熟

望、また最初の指揮官には関行男大尉

（海兵七〇期）がこれに当たること

を、玉井副長から聴き胸が迫った。

（10月25日敢行）

大西中将が特攻隊に名前をつけるよ

うに命ぜられ、玉井副長と猪口参謀が

神風ではどうだろうかということに

なった。猪口参謀が「祖父が鳥取藩の

剣道の指南番をされ、その号を神風と

いうておりました。神風というのはど

うでしょうかと提案、玉井副長が賛

成、大西中将が神風特攻隊と命名され

た。

大西中将は勇猛、果敢、思いやりあり、先見の明ある稀に見る智将で、十年早く生まれていたら米國との戦争は防ぎ得たかも知れない。

昭和20年8月16日部下のあとを追いつ自刃せらる。

（平成3年7月記す）



「伏龍特攻」と私

石野 博

「わが伏竜訓練記」から

(一) 四奈良会機関誌 緯 二号

要員指名。ある日突然

(二) 「水泳練達が絶対要件」と分隊長

長

「伏龍の思い出」については、かねてから、何らかの形で纏めておきたいと思っておりました。

僅か二月半の経験でしかなかったのですが、実施部隊・特攻部隊としての気概に溢れ、変化に富んだ明け暮れは、予科練とは一味違ったものがありました。

それらの中で揺れ続けた精神的な未熟さや、無鉄砲に突き進んだ若さなどを、自分なりに整理しておきたい気持ちと、今一つは、子供達に若かりし頃の親爺の生き態を示しておきたいとの思いもあつた訳です。

以下は、私の所属する戦友会「四奈良会」の機関誌等に披露した拙い内容ですが、改めて読み返してみますと、加除訂正を要するところが多々見受けられ、内心慥たるものがあります。その是正に併せて、これを機に、「知られざる伏龍」にまつわる幾つかの話題にも及んでみたいと思つている次第です。

など聞くことも出来ないことから、

不安は更に胸の中に拡がったが、ぐずぐずしていれば、当然その見返りがあるやバッテリーに連がることは目に見えているので、気持ちとは裏腹に、恰好だけは元氣そうに装って、先任教員に挨拶し分隊長室へ赴いた。

内心の動揺を抑えつつ、直立不動で申告を終えた私に、分隊長(橋本秀太郎海軍大尉)はいきなり

「君は、久里浜という処を知っているか」

と質問された。神様のような存在の分隊長に呼ばれたというだけで、心中穏やかならざるものがあるのに、いやが上にも圧迫感を覚えるばかりの場所・雰囲気である。

「は？」

と返事はしたものの、質問の意図が全く判らない。

疑心暗鬼の精神状態で思い浮かんだ『久里浜』も、『九十九里浜』を気にし始めてからは、完全に両者が混然一体となつてしまつたため、咄嗟の回答が出来る苦もなく、ただ口をもぐもぐさせるばかりで、まさに立ち往生の態であつた。

分隊長は、私のこうした事情にはお構いなく、一際厳しい口調で語り掛けられたが、その概要は

「戦局が極めて急迫しており、各特攻基地からは、連日のように出撃が続いていること。敵艦隊を迎え撃つべく、新兵器が開発され、その訓練が久里浜で開始されていること。やがては『スイサイ特攻』としての編成が行われるであろうこと。そのための要員派遣が滋賀空に下令されたこと。」

等であつた。そして最後に

「君は一人っ子のようだが、今の戦局は、家庭の事情も考慮されない状態にあることは判つていると思う。特攻志願に関しては、君自身の熱望もあるし、今回の場合、特に水泳に自信のあることが不可欠の要件でもあることから、これらを総合して行つてもう一つのこととした。しっかりやつてくれ」と結ばれたのである。

話の途中から、さしも鈍感な私も、これは特攻選抜の話だな、と感付いたため、それまでの不安は一挙にけし飛び、逆に希望に満ちたような気分になつてしまひ、

「ハイ。ありがとうございました」と大声で返事をして、窘められたような始末であつた。

(二) 「スイサイ特攻って何だ？」

とに角嬉しかった。どのような形に

しろ、念願の特攻要員に選抜されたことは、私にとって光栄極まることであり、先に征った同期の桜にも、漸く顔向け出来る安堵感と自負心で、胸の中は一杯だった。

班に帰ってからも心の動揺は収まらず、「口外するな」の分隊長指示も、浮付いた気持ちが一言二言と綻びて、瞬く間に班員の知るところとなってしまうた。

「スイサイ特攻って何だ？」

があちらこちらで囁かれ、挙げ句の果てに、疑問を私に質す者まで現れるにいたっては、いささか慌てざるを得なかった。

しかし、皆にはスイサイ特攻そのものよりも「久里浜」の方に関心があり魅力だったようにも思える。

全員が横志飛であることから、たとえ特攻とは言え、故郷に一步でも近くと思うのは人情で、特に、東京・神奈川出身者には、私のように「九十九里浜」と混同するような者がある苦もななく、中には「俺と替え」などという者もあった。

スイサイ特攻の何たるかについて、分隊長からも詳細は告げられなかったし、私自身何一つ知識の持ち合わせがある苦もなく、やがて赴任先の伏龍部隊でコッテリ知らされることに

なるまでは、具体的には全く判らなかつた。「スイサイ」が「水際」であることを知るに及んでからは、おぼろ気ながら想像できたような気もした

が、豈図らんや
「潜水服を着て海底に潜み、上陸せんと来襲する敵舟艇の真下から、捧機雷とともに体当たりする特別攻撃法」

であることまでは思いもよらなかつた。

結局、滋賀空からは五名が選抜派遣された訳であるが、私の分隊から三名(二班 私、五班 池徳次・現小沢、八班 森口三千夫・現山中)何れも静岡出身というのは心強い限りでもあつた。

二日後、滋賀空司令・副長はじめに隊者総員による「帽振れ」を受けて隊門を後にしたが、私達の橋本分隊長が最前列にあつて、あの独得な敬礼を最後まで崩さずに見送って下さった姿は、脳裏に深く焼き付いて忘れることが出来ない。

七十一嵐。又の名を「伏龍特攻」

(一) ところ

私達の赴任先である海軍工作学校野比分校は、三浦半島久里浜の一隅、野比海岸の松林の中にあつた。

学校とは言っても、堅固な木造二階建兵舎一棟と、木造平屋の事務室兼炊所があるだけで、周囲の仕切りもないし練兵場も見当たらない。

訓練で出払っているためか、兵舎内に人影もなく、号令一つ聞こえない。松林を揺さぶる風音は、小学校での林間学校を思い出させるような雰囲気であつた。

先任者等による、厳しい訓練の展開を想像していた私は、肩すかしを食つたような思いだつた。しかし、私達の受け容れに当たられた乗松兵曹長が、物静かな口調で

「嵐部隊第七十一突撃隊が、今日からの諸君達の正式な部隊名である。海底から、敵の上陸舟艇に、爆雷攻撃を仕掛ける特攻戦術であるため、伏龍特攻とも呼ばれる。」

新編成の部隊で、装備も環境も充分とは言えず、特に要員については、現在各兵科の間で編成しているため問題点が多い。その意味からも、評価の高い予科練が、あらゆる場面で真価を発揮し、先達になってくれることを期待している」

と口達された時には、いよいよ実施部隊に来たという緊迫感で、胸の鼓動が一際高まったのを覚えている。

(二) ひと

艦隊帰りの現役や召集兵も夕食時、先任下士官の口添えて、五人それぞれが自己紹介を行ない、いよいよ列伍に加わつたのであるが、その際

「この者達は、遅れては来たけれども、俺達を簡単に追い抜くだけの素質をもっている連中であるし、何かにつけて中心になってもらわねばならない。近い内に任官の予定ということも聞いているので、そのつもりで面倒みてやってくれ」と付言され、私達を感激させてくれたものである。

隊の編成は三十名位だつたと思う。一曹の先任下士官を筆頭に、二曹が四人、五人、兵長は四人、以下各級位の内、一水が多かつたが、召集の二水も若干名含まれていたのには驚いた。

隊員の半数が現役で、残りが志願と召集。また、現役の半数が艦隊帰りであり、科別としては兵科(砲術・水雷)が多く、機関科は四・五人だつた。

最初は、定員分隊ではないのかと危惧された程だつたが、このような構成の中に編入された私達の立場が、如何に期待されたものであつたのかは、日を追うに従つて知らされることになるのである。

奇しくも、この人達は、全員が舞鶴鎮守府籍で、私達の育った滋賀空も舞鶴管下にあることから、横志飛ではあっても、終戦時一緒に舞鶴迄引揚げることになったのは、浅からぬ因縁だったのかも知れない。

それにしても、赴任当日、乗松兵曹長の口達を受けて以来、終戦除隊迄の間、士官・準士官との出会いが極めて少なく、特に訓練の場において、一度も指揮・指導を受けたことが思い出せないのは、どういうことなのであろうか。今もって不思議でならない。

(二) もの

(一) 新兵器の正体

伏龍は、海底に待機して、求襲する敵舟艇の真下から、爆雷攻撃を仕掛けるのが任務であることから、その装備・形態に高い関心があったことは当然で、滋賀空の分隊長から聞かされていた「新兵器」なるものには、密かに胸躍らせていたのだが、工作学校の基礎講義でお目にかかったものは、何と、地球儀型で、前面ガラス着脱式の鉄製潜水帽・厚手ゴム製潜水服上下・小型ボンベ等からなる潜水用具一式であった。

(二) これが新兵器か

と、私達は一樣に首を傾げたものだが、現代風に言えば、まさに

「ウソー！」

の心境であった。従って、これを着て、海底に秘匿してある攻撃用兵器（これこそ新兵器）を操作するのではないかと、と自分勝手に恰好の良さを想像したのも、無理からぬことだったと思う。

新兵器と言われる所以は、小型酸素ボンベと、空気清浄函によって、長時間（と言っても約二時間）海中の滞在が可能であり、潜水服内に適宜酸素を送入・排出することによって、海面への浮上と、再度海底への沈下が自由自在、という点にあったのかも知れない。

ひと口に潜水服と言っても、そこは軍隊のことであり、一つ一つに、尤もらしい名称がつけられていたことは言うまでもないが、四十年以上経った今、覚えていけるものは一つもない。何れにしても、外国のフロッグメン、あるいは当世流行のマリンダイビングに見る装備の優秀さ、洗練されたスマートさなどは、程遠いものであったことは確かである。

(2) 装備の単独着脱は不可能
工作学校での基礎講義に続いて、実地訓練は、野比分校の前浜で行なわれた。

最初は、伝馬船で水深三〜五メートル

ル位の地点に行き、船上で潜水装備一式を着装のうえ、舷側に設けられたハシゴを伝って海中に潜ることから始まった。

透明度が高く、海底の様子が実によく分かることは、訓練員の安心感に対する心理的効果を高めるに充分で、初心者訓練には最適の条件であったように思う。

船上での装備着装は、先ず毛糸製のシャツ・ズボン・靴下を素肌のうえに着込むのである。次いで、潜水服のゴムズボンを穿くが、ベルト部分は鉄輪のため、ずり落ちないようにその内側から両肩への紐を通す。

両足に靴ならぬ厚さ二種の鉛の草鞋を履く。首に手拭いを巻く。潜水服上衣を着る。着ると言っても、両腕を通し、ポッカリ空いた首部分の鉄板に頭を打ち付けられないよう、慎重に首を通すのである。先刻首筋に巻いた手拭いは、鉄板に直接肌が触れることを防止するためである。

首を出し両手首が出た時点で、上衣の裾部分と、ズボン上部の鉄輪を尾錠で結合する。鉄の潜水帽を被る。潜水帽底部部四つの穴を、上衣の首部分鉄板から突出している太さ一・五種の螺子に通し、一握りもあるようなナットで固定し、大型スパナで締め付けるの

である。

小型酸素ボンベ二本と、これに装着された統二十五種、横二十種、厚さ四種のブリキ製空気清浄函を背負う。腰部にセットされた弁を操作して、潜水帽の中への酸素の流通状態を、また、帽内左後頭部付近に設置された排気弁を頭で押して、それぞれの装置稼働状況を確認する。

足に履いたのと同程度の重量の鉛を胸に着け、命綱を腰に巻き付ける。最後に潜水帽前面のガラスが、外からネジに沿ってはめ込まれ、帽の頭部を一つボンと叩かれることが、着装完了の合図になるのである。

脱衣はこの逆になる訳であるが、勿論単独での着・脱は不可能で、その他の準備も含め、二〜三名のペアで行わなければならないのが欠陥の一つでもあった。

(3) 「鼻から吸って口へ出せ」

潜水帽の前面ガラスがはめ込まれ、音が遮断されると、スパナで力一杯締め付けられると、もうぼんやりしていられない。

先ずは、腰の弁を開き潜水帽の中へ徐徐に酸素を送り込む。

そして、この時点から訓練の鉄則「鼻から吸って口へ出せ」

の呼吸法が始まるのである。自然の呼

吸法でもあり、潜水帽内に装置されたマウスに、口を押し当てて息を吐き出すようにしてあることから、当然のことと思つたのだが、千差万別の人間の体質ゆゑ、必ずしもそうとばかりはいかなかつたらしい。

例えば、何らかの失敗やらアクシデントが発生した際、ショックによって呼吸が荒くなり、必然的に口からの呼吸が多くなるし、鼻に故障ある者は、日常生活でも口で呼吸せざるを得ないことが多い筈である。

呼吸法をやかましく言われる理由について、詳しいことは忘れたが、要するに、鼻から吸ってマウスに吐き出す呼吸温度と、口から吸ってマウスへ吐き出すそれとは、後者の方が遙かに高温となり、マウスを通じて送られる空気が、空気清浄函に内蔵された苛性ソーダに影響し、著しく溶解度を早め、耐用時間を短縮させるからということであつた。潜水時間によつても異なるが、事実訓練終了後の空気清浄函は、例外なく素手で触れぬ程の高温であつた。

また、高温のため溶解したソーダは、吸入管から潜水帽に流れ込み、頭上からもろに降り懸かかつて、重度の火傷あるいは失明、更には殉職にまで及ぶ悲惨な事例を、再三に亘り発生させ

たのである。

随分厳しく叩き込まれた筈なのに、呼吸法にまつわる事故を始め、潜水服・帽の尾錠、ナット類の締め付け不十分、酸素ボンベ容量未確認、空気清浄函内部末点検等、基本的ミスによる大小の事故は後を絶たなかつた。

事故原因については、その殆どが、乱暴な言い分だが

「言われた通りにやらなかつたからだ」

で処理された。しかし、呼吸法に關してのものはともかく、その他の事故は、他人の不作為に起因することが多かっただけに、関係ペアは勿論のこと、私達にも、後味の悪さとやり切れなさが、重くのしかかつたことは言うまでもない。

(4) 海藻に座る魚がわかれば一人前

裝備が相当な重量のため、舷側のハシゴから海中に入るには、手助けを受けなければならぬ。船の上では、身動きもままならぬ状態だつたものが、海中ではスムーズに動けるし、陸では引き摺るのがようやくな程重い模擬棒機雷も、素に操作出来ることなど、理論はともかく実際の経験で味わつた意義は大きい。

最初の頃は、心配の余り酸素を出し

過ぎる傾向が多く、入水前から潜水服に充満させてしまい海中に沈むどころか、大の字で浮いてしまつたり、海底からパンパン膨れ上がった潜水服が、勢い良く海上に飛び出して来たり等、誰もが経験した笑えない失敗もあつた。とに角、海底での歩行が自由に出来るようになることが先決だつた。

自分では、陸を歩いている時のように、背筋をぴんと立てているつもりでも、前屈みで海底との角度が五十度位になつてゐる姿が普通で、最初はその事が判らなくて、すぐ目の前に続く海底を、

「急な坂だな」

と思つたりしたものだつた。陸と違つてどちらを向いても背一色。目印とて何一つなく、自分の歩いて来た跡に、砂が若干舞い上がつてゐるのを確認するのが、方向を知つた一つの手段であつた。

「海藻の間に座つてゐる魚が分かるよ」

「海草の間に入れば一人前だ」と言われたが、訓練も度を重ねるに従つて、座つてゐる魚をみつければ、魚を追ひ掛け回すことも出来るのではないかと思へる程に、精神的な余裕を持てるようになったし、技術もそれなりに順次体得出来たことだ。

海底から浮上して、海上の状況を確

認し、再度海底に沈下することを繰り返す偵察訓練、装置の許容限度一五メートルへの潜入訓練、頭上通過の指揮船への突撃訓練(模擬棒機雷攻撃)、深夜における海岸での潜水服着・脱訓練と、海岸の隠蔽用蝸壺から海底までの自力歩行訓練等、全てに亘り最初にマスターしたのは私達である。

しかも無事故とあつて、当然のこととは言いながら

「さすが予科練」

の声は一際高く、奈良・滋賀での訓練が何時の間にか身についていたことを再認識して、嬉しくもあり誇りに思つた次第でもある。

しかし、夜間訓練で、波打ち際に、あるいは海中での命綱に、揺れてきりめく夜光虫を見る時、その儚なさにわが運命を見るようで、何とも言えぬ寂しさを感じたことが、一度ならずあつたことも確かである。

訓練が終り、前面ガラスを外してもらった時、流れ込んでくる空気の美味さ。生きて帰れた喜びを腹の底から感じさせてくれるこの味。何とも言葉に言い現せないもどかしさは、経験した者のみぞ知る格別な感慨とでも言うものであろうか。

その反対に、訓練開始で前面ガラスをはめられる時の気分は、恐らく棺桶

の蓋をされる時と同じではなかるうか もって折りにふれ厳しく胸に迫るもの
ときえ思われる程で、何時になっても を感ずるのである。
嫌でたまらなかつた。

前面ガラス着脱を巡る悲喜交々の思
い出は、即「伏龍」そのものとして、
心の裏に深く刻み込まれており、今

編者 石野博氏回憶記はまだ続きが
あるが、次号以下に掲載させ
てもらいます。

船舶特幹

二期生会の集い

船舶特幹二期生会第25回総会は平成
3年8月25日(日)、船舶特幹発祥の
地香川県小豆島で開催された。

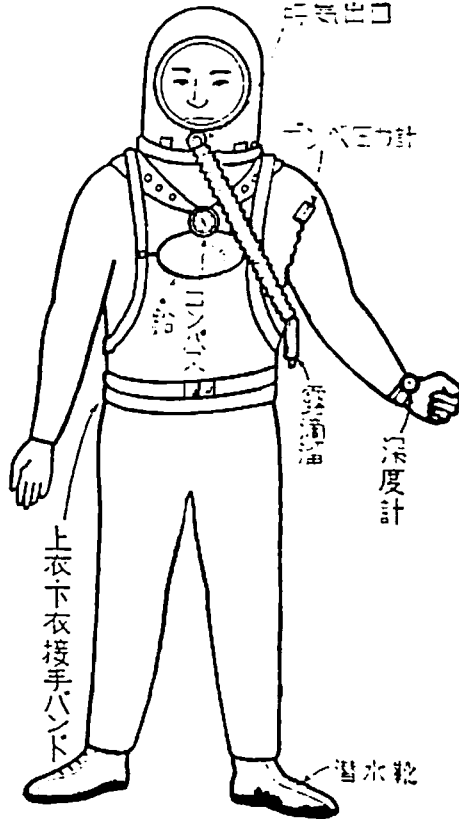
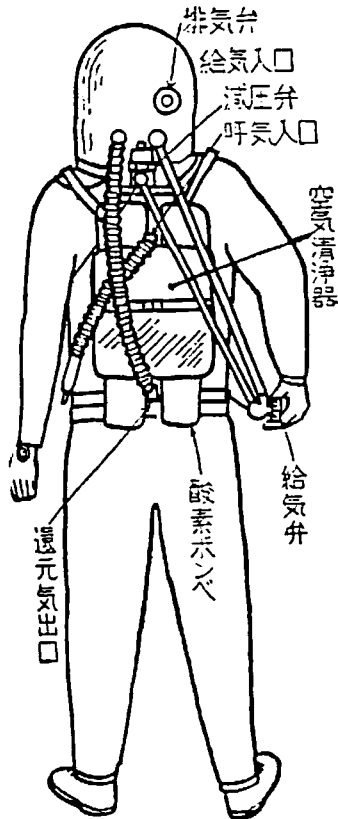
二期生総会は毎年8月の第四日曜日
に全国の各地区を巡回して開催されて
おり、五年毎に小豆島に戻ることに
なっている。今年も25回目と云うこと
で小豆島の「ホテルニュー観海」が会
場となった。観海楼は当時の将校集會
所になっていた所でもあり、二期生会
の定宿となっているホテルである。

第25回という記念すべき総会が、丁
度日米開戦五十年目に当たるこの年に思
い出の小豆島で開かれることになった
のも何かの因縁であろうか。

ホテルから見える屋島や余島の眺め
は今も昔と変わりなく、故郷に帰ったよ
うな安らぎを与えてくれる。

16時30分総会開始。出席者は、来
賓、会員とその家族合計二〇三名の盛
況である。

特に今回は特幹二期生としては、機
動輸送中に米軍機と交戦、唯一人の戦
死者となられた戸田新八候補生のご舎
弟の富夫氏の参加もあり、一層有意義
な総会となった。17時30分無事終了、



記念撮影を行い一たん休憩、一風呂浴
びて汗を流す。18時30分宴会開始。地
元の名士の参加もあり宴は飲む程に高
まり又読売新聞社の取材もあり、盛大
で思い出に残る一夜となった。
翌26日は八幡神社の境内にある鎮魂
碑に詣でたり、旧部隊地跡を見たり青
春の日を思い出しながら来年の再会を
楽しみに別れを惜みながら散会となっ
た。(今井記)

特潜碑顕彰祭

行われる

- 平成3年特潜碑顕彰祭は、風薫る5月18日広島県安芸郡音戸町波多見八幡神社境内に在る碑の前で行われた。
 - 全国各地からの参加者は、ご遺族・来賓・全員等80有余名を数えた。特攻隊慰霊顕彰会からは理事長鈴木暎五郎氏から来賓として参列していただいた。定期呉在任の山本昌男氏（兵科予備学生3期・艇長講習9期）司会のもと
 - 1. 軍艦旗掲揚
 - 2. 修祓
 - 3. 祝詞奏上
 - 4. 玉串奉奠
 - 5. 軍艦旗降下
 - 6. 世話人代表挨拶
八巻悌次氏
 - 7. 神酒 拝受
 - 8. 終了した。
- 本年は祭主が特潜碑奉賛会に替わっての第一回であり、一寸戸惑いも在ったが盛会裡に終了出来た事は当事者として大変喜ばしい事である。
- 尚顕彰祭は毎年5月第3土曜日午後1時（時間は多少変更あるかもしれません）より前記の場所で行われますので参拝していただければ幸いです（松井記）



平成4年特潜碑

顕彰祭が行われます

上記は例年通り、五月に行われます。

多数の皆様のお参加を希望致します。

日時 平成4年5月16日

午後1時より

場所 広島県安芸郡音戸町波多見

見

八幡山神社

交通 バス JR呉駅より

「倉橋」方面ゆき

約40分（波多見）

下車すぐ前

タクシー JR呉駅より

約20分

問合せ先 ☎03-3350-1115

八二

（特潜会）

ビデオ 頒布中

平成3年春の靖国神社における「特攻隊合同慰霊祭」の模様と、同年秋の第四十回「特攻平和観音年次法要」を収録したビデオが完成致しました。ご希望の方には左記要領でお分け致します。

1、「特攻隊合同慰霊祭」

約60分 頒布価格金四千元

2、「特攻平和観音年次法要」

約60分 頒布価格金四千元

いずれも送料含む。

1、2 両方セットでご希望の場合は

頒布価格 金七千五百円です。お申し込みは「現金書留」で。

〒162 東京都新宿区新小川町

4-24

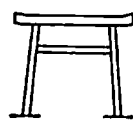
中央クリエイト

☎03-33235151 27まで

到着まで2週間みてください。

締切は4月1日消印までとさせていただきます。

たきます。



本年度靖国神社における特攻隊合同慰霊祭は3月22日（日）に行われます。詳細は同封の別紙案内文の通り、多数御参列下さい。

特攻隊員の遺書

少 飛 会

少年飛行兵第15期

中 秀夫伍長 (当時19才)

遺書 (原文のまま)

秀夫事、此の世に生を受けてより二十年間、可愛さ一念を以て育て下されたる大恩は大空より高く海より深いものが有ります。

秀夫は、今迄何一つ不自由なく過ごし得たる事は、御両親の大恩に依る外ありません。今迄大恩を受けるのみで恩返しの一つも出来得ざる事を深くお詫び致します。然し秀夫は今その万分之一の恩返しを、一命を君国に捧げる事に依って出来得ると思つのであります。秀夫は決して無駄死にするのではない事を中家一族に依って喜んで下さい。一機一艦を必ずや轟破し御両親様に満足して戴きたいと思ひ今迄頑張りました。必ずや日本一の母に見せます。

我等同期生早くも一機一艦を轟破し

たる者が数名居ります。我等振武隊も決して負けざる如く最後迄頑張って、一命を有意義に捨てる覚悟であります。

御両親様にも何卒秀夫の働きを見てほめて下さい。

母上には心配の性質ですが、決して取乱して下さらぬ様にして隊員の母たる自覚のもとに、お身を御大切に永く兄上方より楽しく過して下さい。

その他口で述べたる事を実施下され度し、最後に中家の万歳を祝って秀夫出発致します。

振武隊員

陸軍伍長 中 秀夫

御両親様へ

特攻出撃前に

(前略)

御両親様には年も行って居ります事故、何卒充分御身大切にせられまして、秀夫の為す事を見止めていて下さい。

又兄上夫婦に嫌がられる事なく、生命永く楽しく愉快に御送り下さい。秀夫は我が子であつて御国の子である事は承知ではあつたと思ひますが、決して取乱されず、軍人の親たる、少年飛行兵の親たる自覚を御願ひ致します。

(中略)

秀夫亡き後は墓は先般お願いの小一兄上の左に一段小さく造って下さい。尚御賜金は飛行機に献金して下さい。

母かね殿より少飛会宛の手紙

尚、両親宛に種々御礼の言葉を書き、一機一艦轟沈して必ず小一兄上の仇を討つ事を誓ひ、その他の事は遺書に記してあります。……と結んであります。

私の知って居る記憶

戦死は、昭和二十年四月二十八日沖繩本島周辺の敵艦に体当たりしました。

白木の箱として帰宅致しました時の階級は

陸軍少尉 中 秀夫
功四級勲六等

編纂される方々の御心尽くしに対し秀夫は草葉のかけから喜んで居る事だろつと思ひます。

少年飛行兵第15期生

大村俊郎伍長 (当時18才)

遺書 (原文のまま)

御父上様、長らく御無沙汰致しました。俊郎も至極強健にて、操縦任務に献身しております故何卒御安心下さい

い。内地の報を耳に致す度に、我が胸中は裂ける思いで一ぱいです。

マレーの状況も日一日として悪化致し、いよいよ我々の番がきたようです。特攻隊員として敵空母、戦艦、轟沈です。その時を待つのみとなりまして。

お父様、俊郎は今日の鎌倉に生まれしことを嬉しく且幸福と思つています。

俊郎、生を致して今日まで何一つ孝を致さず、而し俊郎一度愛機と運命を共に致した時は、どうぞこれが俊郎の最初の又最後の孝とお思ひ下さい。皇民と生れし我が幸、人間一度は死するものなり、黒か白か二つのうち一つなり白き箱に収りて帰りました暁はどうか花の一枝でも立てて下さい。男子の本懐之に過ぎるものあらん。敵、本土上陸せば親も子も非ず。只国に尽くすのみ。俊郎、靖国の社にて親子体面なり、噫壮なり、我十八才にして特攻隊員として死ぬるか——悠久の大義に生きん——我笑うて死なん——マレーの夕暮れ、夕陽が椰子の葉に沈まんとす、我一人遠き故里の母の顔をまぶたに浮べ——

父母の健康を祈る、願わくば靖国の庭に来れ

妹時枝に告ぐ

わが妹と思えば嬉しく筆を走らさ
ん、兄として、何一つ面倒を見ずし
て、死するとは実に悔ゆる所なり、而
し我が志何か通わん、十五才なりと雖
も今は子供に非らず、兄無き後は、よ
くよく母に仕え兄の分まで孝行致して
くれ、勝子（時枝の妹）の指導また大
なり、私心に走る無かれ本性を理解せ
よ――

国のため何か惜しまん、我が命
死して護国の花と散り行く

感 状

七生昭道特別攻撃隊

陸軍曹長 徳 永 勇 夫
同 山 本 玄 治

陸軍伍長 大 村 俊 郎

右ノ者ハ昭和二十年七月二十六日馬来
半島「ブーケット」附近ニ出現セル英
機動部隊ニ対シ急拠奇襲スベキ命令ヲ
受クルヤ徳永曹長指揮の下ニ早朝勇躍

基地ヲ出発シ悪天候ヲ冒シテ索敵ニ努
メ遂ニ午前十時三十分ニ至リ英機動部
隊ヲ「ブーケット」沖ニ捕捉シ猛烈之
ニ攻撃ヲ敢行シ徳永曹長ハ卒先敵空母

ニ突進セルモ惜シクモ敵ニ離脱セラレ
續ク大村伍長ハ愛機ヲ駆ツテ決死空母
ニ突進ス然ルニ惜シクモ攻撃寸前ニ於
テ其ノ愛機ハ多数被爆ノ為火ヲ吐クニ
至リタルモ同伍長ハ執拗ニ操舵シ空母

二機首ヲ指向セルモ遂ニ及バズ敵艦至
近距離ニ自爆ス

敵艦隊亦攻撃ヲ恐レ悪天候ヲ利用シ
テ回避シ我が攻撃ハ奏効セズ徳永曹長
以下涙ヲ吞ンデ帰還セリ徳永、山本兩
曹長ハ飽ク迄英機動部隊ヲ攻撃シテ其
ノ企圖ヲ挫折セシムベク薄暮雷雨伴ウ

天候悪化ヲモトモセズ決然離陸シ再
ビ決死猛進敵大型艦二隻ニ体当リヲ敢
行シ轟然之ヲ海中深ク屠レリ右執拗壯
烈ナル攻撃ハ遂ニ英機動部隊ヲシテ洋

上速ク遁走セシメ其ノ船団ノ上陸企圖
ヲ挫折セシメタルノミナラズ其ノ壯烈
ナル体当リ攻撃ハ英軍ノ心胆ヲ奪イ爾
後ニ於ケル英艦隊ノ行動ヲ抑制セシメ

タルコト極メテ大ナリ是愛國ノ赤誠ヨ
リ発スル軍人精神ノ精華ニシテ其ノ功
績ハ拔群其ノ誠忠ハ真ニ軍人ノ龜鑑タ
リ仍テ茲感状ヲ授与シ全軍ニ布告ス

昭和二十年八月十日

南方軍総司令官

元帥 從一位 伯爵 寺内寿一
陸軍大将 勳一等 功一級

ある老婦人からの手紙

みなさま 今年の暑さは格別で御ざい
ました。今年も特攻平和観音の年次法
要の御案内をいただき、ありがとうございます。
ございました。私はいつか偕行でこのよ
うな法要があることを知り、ささやか
なお供えをさせていただいた御縁につ
なかる者でございます。

戦後病死致しました主人は工兵で御
ざいまして（編者註陸士38期金沢義重
殿）空とは御縁がございませんが、当
時よりこの若い方々の特攻と申します
ものに心から感謝と合掌をしております
した。主人は独立工兵隊の隊長とし
て、トラック島で終戦を迎えました。

ただ一ヶ中隊が硫黄島で玉碎という胸
の痛いことございました。戦友会が
毎年ございまして、時に下さっていた
だいております。

私の実家の弟（編者註陸士52期松尾
保治）は終戦時成興で単に乗っており
まして、往の燃料をつんで出発予定日
に終戦となり人ごととは思えませんが、
この弟は昭和63年に病死しましたが、
棺の中に花に埋もれて模型機が二機あ
りましたのに胸がジーンと致しまし

た。

先日来てテレビで
特攻の方々のこと
が御ざいました。

丁度高二七才の孫

がいてまして「こんなときにやっばり翔
んで行く？」とききましたら、「お国
の為ならためらわずに翔んで行くと思
うよ」と申してくれ、今時の若い者は
……とは言えないなと思いましたが、
会報に御ざいます親御さんのように涙
もみせずを送り出せるか？とふと思
ついたことです

特攻につながる立場になくて、御案内
の返信ハガキに書き入れることはござ
いません。せめてお花の一くきでも私
の気持をお供えいただけたらと思いま
す。よろしくお取計らい下さいませ

日野市 金沢須磨代



感銘を覚えた意見発表

平成3年8月1日に九段会館で行はれた「英霊にこたえる会」の全国代表者大会に於ける、日本青年協議会の荒木栄子氏の意見発表は、多くの参集者に多大の感銘を与えました。就中特攻隊のことについて若い女性がこのように見られることに私は特に感佩し、本紙に投稿を求め、この一文を頂戴しました。(編者)

戦後四十六回目の八月十五日がもうじき巡って参ります。日本の国を守らんが為に、雄々しく闘って尊い命を捧げて逝かれた二五〇万の御英霊が祀られております靖國神社。私も毎月の参拜とともに、春秋例大祭、学徒出陣の日、沖繩戦終結の日、そして、八月十五日には、お参りをさせて頂く一人でございます。

社頭にぬかずき合掌致せば、英霊様にお守り頂いております事への感謝の念の沸き起るとともに、私を空しくして清らかな心に立ち返らせて下さる…そのような聖なる所が靖國神社であり、そして、私をして少しでも英霊様にお応えし英霊様が殉じられた日本の国のお役に立つ日々を送る事を誓う決意の場が、靖國神社であります。

その靖國神社には私の伯父二人も祀られております。幼い頃より私は祖母に連れられ伯父の命日

には必ずお墓まいりを致して参りました。一人の伯父の墓石には「報國院」という文字が最初に刻まれておりましたが、幼かった私にはその意味が分かりませんでした。伯父を一人の身内としてだけでなく、国に報いて逝った一人として敬愛の念で見られるようになったのは、私が大学生になってからの事です。サークルの合宿で英霊様のご遺書や遺詠に接した時には、国に連なる精神の気高さにおのずと心が律せられました。また、学園祭の時に出会った「氷雪の門」の映画では、ソ連の不法侵攻の卑劣さに憤りを覚える反面、真岡郵便局で本土との連絡の為、最後まで職を離れることなく任務を遂行し、自決をされた九人の乙女の一途な清らかな姿に涙を禁じ得ませんでした。

祖国の危機に巡り会われた若き戦士の方々は、みくにいままだならぬとき

つわものと召されて出でゆく何ぞうれしき

皇国の弥栄祈り玉と散る

心のうちぞたのしかりける

と、透徹されたこのような歌を残され、天皇陛下の御楯となって戦場に散って逝かれました。

昭和天皇様の御在位六十年を奉祝申し上げる映画フィルムを携えて、一隊一名で一年間全国各地を回るといふ機会を与えて頂いた事がございます。全国の護國神社への参拜はもとより、瀬戸内海の人間魚雷回天基地の大津島や江田島の海上自衛隊の教育参考館、九州南端の知覧特攻基地等にも訪れる機会がございました。人間魚雷「回天」の訓練の行われました小島は、暗く、長いトンネルをくぐり抜けた所にあり、一人で訪れるにはあ

まりにも悲しみに満ちており居たたされませんでした。

生還があり得ないあの基地から『七生報國』の白鉢巻をし『回天』に搭乗、敵艦船をめがけて飛散していかれた人間魚雷創始者の一人、仁科中尉の最後の日記にはこう記されています。「神州の曙を胸に、大元帥陛下の万歳を唱へて全力三〇ノット(略)大型空母に体当たり」と。殉職された黒木大尉は「天皇陛下万歳、大日本万歳、帝國海軍回天万歳」と残して逝かれました。お二人とも「後を頼みます」と神州不滅の信念強く永遠の日本を確信し後に続くものがあるとの信念を持たれ、散華されて逝かれたものと思われまします。それに対し、唯、豊かさや繁栄と平和を享受しているのみの現在の日本。靖國神社の遊就館や各地の記念館等に掲げられている英霊様のお写真はお顔も雄々しく、凛々しく、優しく、そして強く、強くおられます。その方々のいさおしに如何にお応えしていくのか…くいつぶし世代と言われる汚名を返上しうる日本人の一人でありたいと、御英霊ゆかりの地へ訪れる度に心定めるのでございます。

昭和六十三年には、『靖國のこころ』の映画が完成し、各地をキャラバンで巡る事となり、靖國神社へ参拝致しましたが、その折、「しっかりとやって」と何処からともなくそんな言葉が過るのでした。

昨年の上皇陛下の御即位を奉祝しての東京の銀座パレードでは、ウグイスの責任者として第一梯団の宣伝車の上に立たせて頂きましたが、あの時

も出発前の薄暗い東京の空を見あげるうちに、護国の英霊様がこのパレードをお導き下さっている！という驚きと感激が胸中漲るのです。目には見えなくとも必ず英霊様は天の高きより日本をご照覧なさっていらっしゃる。そう思えてなりませんでした。

昨今マスコミでは連日の証券会社補填のお金に關する不祥事のみにぎわっています。汚濁にまみれ、聖なる空間が失われている今日の経済至上主義の日本。日本国民の代表である総理や閣僚はこの日本の国に殉じていかれた御英霊の祀られている靖國神社の聖なる庭へ公式に参拝されることなく、それで国民の範としての示しがつくのでしょうか。御英霊の御前に感謝の誠を捧げるという、尊崇な姿というものを示して下さい。こと、それが国を預かる方の責務であるはずです。

新聞に海部首相は中国を訪問するという記事が載っていました。中国の国民感情を重んじるがために、靖國神社には参拝しないとされたならば、日本の国民感情というものは裏切ってもいいとおっしゃるのでしょうか。これでは日本の将来はありません。国の為にじくなつた方を忘れるような国に眞の栄えなどあろうはずはございません。日本が中国に対して罪を犯したとするこの偏った自虐的ないわゆる東京裁判史観を一日も早く払拭し得ない限り、御英霊の名譽の回復も御英霊への感謝の気持ちも、そして日本人としての誇りの回復もあり得ないのではないのでしょうか。

七月に早稲田大学の学生七人と話す機会がございました。その中の一人は「特攻隊員の残された

文章はどなたの文章を読んでも心に強く働きかけてくる。こうした強い文章を日々拝読していけば、強い生き方ができると思う」と語っておりました。国家不在の教育を受けていても、英霊様のご遺書や遺詠に接し、考え、やがて日本人としての感動が若者の心を突き抜けて行く。日本人としての誇りを、心の琴線に触れる機会を若者は心の何処かで必ず求めていると実感致した次第です。祖国の防波堤となられた沖繩戦の話。中学生の鉄血勳皇隊や従軍看護婦として任にあつたひめゆり、しらうめの女子学生隊、とりわけ、唯ひたすらに身を挺して、負傷兵の看護にあたり、祖国に散って逝かれた若き御霊らの御姿は日本女性には鑑であり、日本人であるなら誰でも心動かされずにはおれないと信じるものでございます。

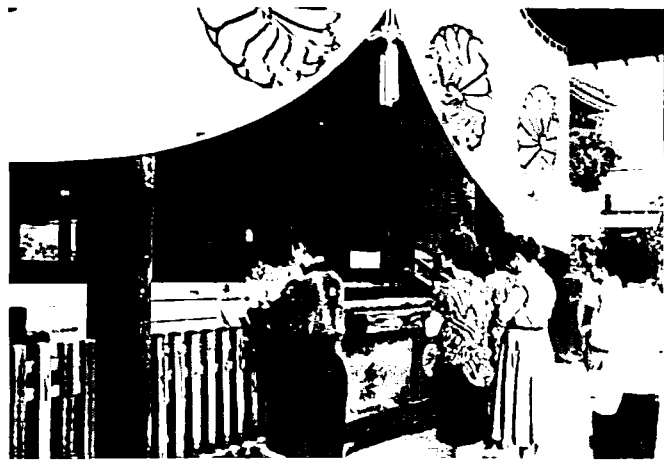
昭和六十三年八月十五日。あの日、昭和天皇様には御病を押されて全国戦没者追悼式典にご臨席遊ばされました。十二時の時報がなつた時にお立台に間に合われなかつた程の御姿にもかかわらず、陛下には片時も戦没者の事をお忘れにならず、「今尚胸の痛むのを覚えます。」とこうお述べになられました。あの式典最中、晴れ渡つた空から俄に雷が轟き大雨が降り出したのを強烈な印象として思い起こします。御英霊の涙だったのかもしれない。

首相の公式参拝が中止となつた昭和六十一年の八月十五日には、昭和天皇様には次のような御製をお詠みになられました。

この年のこの日にもまた靖國のみやしろのことにうれひはうかし

昭和天皇様には、この日にも「また」と強調までなされておられます。この御製を拝しつつ、あの御病の時にも御臨席なされたお姿が重なり合い、胸の張り裂けるような思いが致したものでございます。

昭和天皇様と同じ御心であらせられる今上陛下の大御代に生かされる者として、大御心を仰ぎながら、永遠の日本を確信し国に殉じられた御英霊に恥じない生き方を選び続け、次代を担う青少年が日本の歴史に誇りを持ち、英霊に感謝の誠を捧げていける日の為に、微力ながらも尽力して参りたいと願うものでございます。



特攻平和観音合祀霊名簿の再調査を終る

理事長 鈴木 瞭五郎

空挺特攻

八八名

戦車特攻

九名

(海軍)

航空特攻

二、五三二名

六六名

一〇四名

二、五五六名

三名

六、九五二名

(合掌)

特操之碑頌徳祭

「特操之碑」は昭和46年3月に京都霊山護国神社の境内に建立され除幕式が行われ、二十年を経過しました。京都での頌徳祭は隔年ごとに開催されており、

第十一回目の頌徳祭が平成3年10月6日に、遺族・来賓及び各期の戦友二百五十名が参集し盛大且つ厳かに行われました。

当日一入感慨深いものとして、ご遺族では御両親が物故された方が多い中で、現在もご健在でおられる故込茶章陸軍大尉之尊(六十二振武隊)の御父上様が、九十五歳の高齡に拘わらず参列されたことです。

更に私達が感激致しましたことは来賓として特攻隊慰霊顕彰会事務局長 最上貞雄様と航空碑奉賛会会長 岩宮満様と恩師の教官の方々のご臨席です。ここに厚く御礼申し上げます。

ちなみに特操の戦死者は一期生から四期生まで特攻及び戦死者を合わせて一〇一二柱になります。しかしながら未だに生死不明の方がおり現在も調査しております。

白鷗遺族会(飛行予備学生の会)平成二年度秋季戦没者慰霊祭(第87回)に参拝して

理事長 鈴木瞭五郎

平成3年10月20日(日)午前11時より開催された右慰霊祭に招待を受け靖国神社を訪れた。五百名に及ぶ参拝者が集い、慰霊祭は盛會裡に進み、祭文奏上の後斉唱された「同期の桜」に御老母の感泣が聞こえ、一同目頭を熱くした。昇殿三拝は三群に分れて行なわれ、海軍飛行予備学生総計一〇、九三二名のうち散華された二、四三七名戦没の御英霊の前に頭を垂れた。祭主祭文の中に特攻戦死が強調されていたのが印象的であった。終って正午より靖国会館において定期総会と懇談会が催され、歌曲のサービスもあって和樂談笑の空気に包まれ、午後二時半名残を惜しみ散会した。

年会費納入のお願い

特攻隊慰霊顕彰会の年会費は千円となっております。同封の郵便振替用紙を使って納入して下さい。会の事務は理事の奉仕によって処理していますので、事務の劃一簡便にするため、手渡しの納入は努めて避けるようお願いします。

渡邊 博厚



特攻平和観音合祀霊名簿は昭和31年5月特攻平和観音奉賛会世話人代表により、陸軍は河辺正三大将、菅原道大中将、海軍は及川古志郎大将、清水光美中将、福富繁中将、寺岡謹平中将の手によって調整された。しかし、それには航空、空挺各特攻と特潜、回天の各水中特攻が対象とされ、㊦、震洋の各舟艇特攻、戦車特攻は含まれていなかった。平成2年3月大東亜戦争開始五十周年をトシ、特攻隊慰霊顕彰会は「特別攻撃隊正史」を刊行し、その第2部で特別攻撃隊戦没者名簿を総括確認した。この名簿を元にして本会は特攻平和観音合祀霊名簿の再調査に着手し、平成3年9月の第40回特攻平和観音年次法要までに新霊名簿を謹製し、世田谷山観音寺に奉納した。

(陸軍)

航空特攻

一、三三二名

㊦舟艇特攻

二六三名

陸軍空挺部隊慰霊祭二件

それは戦友がいなくなっても

絶えることはない！

高野山「空」の墓慰霊祭

この墓は昭和11年に挺進戦友会が建立した。墓石の下の石室には一万二千の霊名簿を納めた。その後旧軍空挺隊員と自衛隊空挺隊員及びその退職者を丸とした全日本空挺同志会が設立されたので、その会が墓を管理して現在に至っている。

建立当初この墓に合祀したのは戦死者だけだったが、その後旧軍、自衛隊



自衛隊員による奉納演武

を問はず会員で死亡した者は、遺族の申出によって分骨を納めることにし、既に戦後の合祀者が数百柱に及んだ。

毎年9月に空挺同志会主催の慰霊祭を行っているが、本年は9月15日に行い、新に八柱が合祀された。

空挺同志会の主な幹部はまだ旧軍関係者が占めているが、このような状態で運営されているので、自衛隊空挺部隊が存続する限り、慰霊行事は絶えることはない。

川南町護国神社祭典

かつて陸軍落下傘部隊の基地だった処

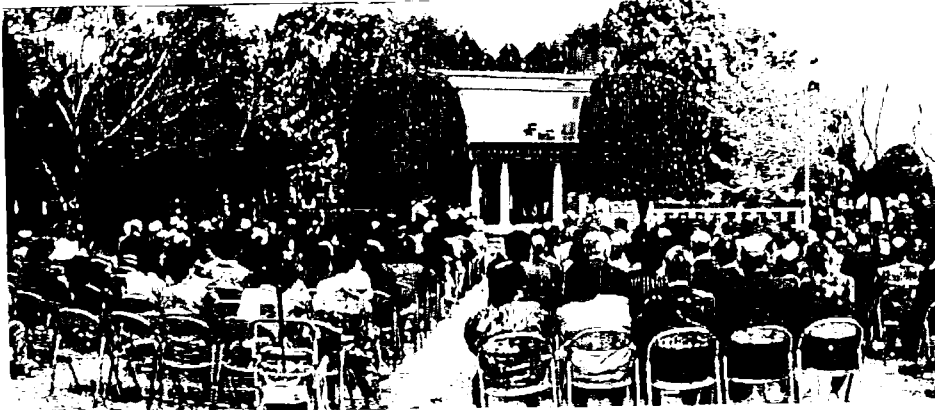
宮崎県児湯郡川南町の護国神社には同町出身の戦死者六三四柱に加えて、陸軍空挺部隊一万有余の戦死者のみ霊も合祀されている。それは陸軍挺進練習部の管内にあった挺進神社が、戦後進駐軍に焼払はれ、行く場を失った英霊を、昭和21年に再建された川南村霊堂にお祀し、その後31年になって正式に護国神社となったからである。

この護国神社は言はば村社のようなもので、毎年11月23日に町長が祭主と



境内裏庭にある空挺の碑

なり盛大なお祭りを行い、昔の空挺部隊の戦友達も全国から多数参加している。



九つの鉦を叩く

— 血風隊生き残りの心境 —

元第一〇振武隊副隊長・特操一期

窪川 敏郎

感 状

陸軍少尉 田 中 隼 人

陸軍伍長 大友 昭 平

同 中牟田 正 雄

同 小 浦 和 夫

同 清 沢 広

同 西 村 敬 二 郎

右者沖繩方面ニ米寇中ナル敵上陸船団ノ攻撃ヲ命セラルルヤ昭和二十年五月二十六日周到ナル準備ノ下離陸出動敵機ノ跳梁スル洋上ヲ長駆突破シ沖繩周辺ニ達スルヤ敵戦闘機ノ妨害ト熾烈ナル対空砲火トヲ冒シテ敵艦船群ニ殺到強烈必殺ノ体当リ攻撃ヲ使行シテ艦船種不詳数隻ヲ撃破シ以テ皇國守護ノ大任ヲ果セリ

其ノ武功真ニ拔群ニシテ其ノ忠烈ハ全軍ノ龜鑑タリ

仍テ茲ニ感状ヲ授与シ之ヲ全軍ニ布告ス

昭和二十年七月二十日

從三位

航空総軍司令官陸軍大将

勲一等 河辺正三
功二級

右の感状は、昭和四十九年八月四日（日）に、私の僚機たりし故小浦和夫少尉の母堂小浦ひで様

宅を二十八ぶりに再訪問、血風隊員への感状を写真に撮らせていただいたものを書き写したものである。

なお右の感状は額縁のガラスの中に納まっているが、毛筆ではなく活版印刷の文字であった。五月二十六日の戦死に対して、授与は七月二十日付である。初めから二人目に私の氏名も列記される筈であったが……と思うと万感胸に迫るものがある。

私が陸軍病院へ入院中に「金銭出納簿」を支給されたことがあった。これを「住所録」として使用し、現在も実物を特攻遺品の一つとして大切に保存中である。その四枚目のトップに九州の門司明徳少尉の住所が書いてあった。

昭和二十年の十二月二十八日に復員（国立甲府病院を事故退院）したが、沖繩で特攻戦死した者の遺族の住所が不明のままであった。まず彼に手紙を出した。すると彼は習字用紙五枚へ五練飛の復員状況その他の詳細を送付してくれた。二月六日のことである。

二月末には間野飛行隊長より返信あり、特攻隊員遺族の住所氏名が知らされたが、不可解なことに特攻隊長のみ不明であった。昭和二十一年四月二日に五練飛部隊隊長杉本明少佐より第一信（返信）あり、復員局の業務で多忙との事実が判明した。

三月以降、特攻生存者の越村幸、村上久徳高伍長（共に少飛十五期）から返信あり、遺族からも候文で返信が届いた。特攻隊長遺族宅は八幡市役所へ照会、投函するも遂に返信は来ないまま現在に至っている。

三月二十一日受信の故小浦和夫少尉の遺族（故父君小浦初五郎氏）からは何回も返信をいただいた。六月五日の第二信によれば——五月三十日に感状が下附されたこと（六名連名にて）、八月二十日の第三信によれば——七月三十一日に遺骨が帰還、九月六日に告別式との知らせであった。

九月六日（金）第一回遺族宅訪問

杉並区の故小浦和夫少尉宅の告別式へ参列。

弔 辞

謹ミテ故陸軍少尉小浦和夫君ノ英靈ニ対シマシテ一言申上ゲマス。

敗戦後一ケ年ニナリマス今日ノ日ニ沖繩ノ海ニ散華サレタ君ノ遺骨ノ前ニ立ツ時、何ト申上ゲテヨイカ分ラヌ今ノ私ノ気持デアリマス。一年半昔ヲフリカエツテミマスニ大東亞戦争ノ悪化ニヨリ吾々十二名ノ者ハ北京ニ於テ特攻隊員トナリ、日夜生死ヲ共ニシテ訓練ヲ続ケマシタ。君ハ特ニ私コト血風隊第三小隊長ノ僚機トシテ、ヨリ一体トナリ訓練ノ日々ヲ送りマシテ、日頃ノ生活モ共ニシテ何時モニコヤカナ君ハ常ニ上官同僚ヲ問ハズ、実ニ優シイ、ソシテ人ニ好感ヲ与ヘル少年デシタ。今考ヘルト全ク惜シイ少年デシタ。

軍ノ命ニヨリ内地ニ飛来シ沖繩ノ海ニ死ノ出撃ヲシタノハ昨年五月二十六日デシタ。不幸ニモ私ハ重傷ヲ負ヒ入院スル身トナリマシタ。苦シイ入院中モ皆ニ申訳ナイ氣持デー一杯デシタ。ソシテ小浦君達ノ勇マシク突入サレタコトヲ知り一時ハ全クドウシヨウカトモ思ツタ程デス。

三カ月後ノ八月十五日ノ正午ニハ敗戦ノ冷イ報ヲ知り全ク涙ニ明ケ暮レテキマシタ。君ハ戦勝ヲ

信ジテ沖繩ノ海ニ沈マレタノデス。日本ヲ守ルタ
メニ、大和民族ヲ守ルタメニ美シク散ツテ行カレ
タノデス。今ノ世ノ中ハ知ラナイデセウ。今ノ日
本ハ新シイ国トシテ生レ変ラネバナリマセン。再
建日本トハ美ニ大キイ仕事デアリ、又苦シイ仕事
デアリマス。

生命ヲ留メマシタ私ハ、ドンナ風ニ生レ變ツタ
ラヨイカ、迷ツテ来マシタガ、今ハ亡キ小浦君達ノ
分迄モ強イ生活ヘ進ミ立派ナ人間トシテ平和日本
ノ一員トナルヨリ他ニ道ハナイ事ガ分リマシタ。

小浦君ノ英霊ヨ、ヨクオ聴キ下サイ、君ノ尊イ
意志ハ新シイ日本ヲ作ル、美シクモ貴イ犠牲トシ
テ必ズ受継ギマセウ。私ノ職域トシマシテハ新日
本ノ教育ニ邁進スル事デアリマス。

国ノ為ニ身ヲ捧ゲタ事実ハ戦争ニ敗レタ今日ト
ハ云ヘ少シモ変リハアリマセン。尊イ事実デアリ
マス。小浦君ノ霊ヨ、ゴ遺族ノ方モ必ズヤ君ノ尊
イ意志ヲ守ラレテ新シイ生活ニ強ク進マレルデセ
ウ。私モ一度ハ死ノ出撃ヲシタ身デス、死ンダ心
デ苦シイ道ニ乗り出シマス。

今日ハ懐シイ小浦君ノ写真ノ前ニ立ツテ昔ノ事
ヲ想ヒ出シナガラ：小浦君ト話シナガラ又遺族
様ト初メテ御逢ヒシテ昔ノ事ヲ有リノママニ御話
シスル心デ、拙イ言葉ヲ連ネテ、君ノ霊前ニ捧ゲ
ルモノデアリマス。亡キ小浦君ノ御霊ヨ、安ラカ
ニ御眠リ下サイ

昭和二十一年九月六日

元第一一〇振武特別攻撃隊第三小隊長

元陸軍中尉 窪川 敏郎

○和夫最期の便り

昭和二十年六月十一日着の美父あてハガキ
前略

我、元氣旺盛なり、笑って征きます。

皆々様の奮闘健康を祈ります。さようなら

西部第一八九四六部隊 小浦 和夫

これは知覧出撃前夜の五月二十五日の夜、三角
兵舎の中で係の下士官より青い色鉛筆を借りて、
伍長達全員に「最期の便り」として故郷へ出させ
た時のハガキであろう。私は二日前の二十三日に
北九州芦屋局より出してあったので、出撃の日の
朝、下士官に依頼して最後の電報を打ったので
あった。

「ケンキデ イク ケンコウイノル」トシ

昭和四十九年七月七日——七夕の宵に、私は特
攻戦死者および殉職者等の戒名を、色紙に書き連
ねて青世に吊し、玄関の入口に立て、彼ら九柱の
英霊の冥福を祈ったものである。

○故陸軍中尉徒七位勲六等 水崎正直(福岡市)

昭和20・4・14北京市郊外ニテ殉職(特操一期)

○故陸軍軍曹 勲七等 山本利光(大阪府)

昭和20・5・23朝鮮大邱一芦屋間で戦死

(注・朝鮮海峡へ海没と思われる)

○故陸軍大尉正七位勲五等功三級 田中隼人(八幡市)

戒名不明(遺族より全く返信なし) 幹候七期

昭和20・5・26沖繩特攻戦死 行年廿四歳

○故陸軍少尉正八位勲六等功四級 大友昭平

輝勲院忠翔義烈居士(宮城県 少飛14期)

昭和20・5・26沖繩特攻戦死(行年十九歳)

○故陸軍少尉正八位勲六等功四級(佐賀県)

広徳院積義成 中牟田正雄(少飛14期)

昭和20・5・26沖繩特攻戦死(行年二十歳)

○故陸軍少尉正八位勲六等功四級 小浦和夫

誠忠院和夫普照居士(行年十九歳)(少飛15期)

昭和20・5・26沖繩特攻戦死(東京部)

○故陸軍少尉正八位勲六等功四級 清沢 広

清照院大義忠道善居士(少飛15期)(長野県)

昭和20・5・26沖繩特攻戦死(行年十九歳)

○故陸軍少尉 正八位勲五等功四級(大阪府)

清雲院義烈日教居士 西村敏二郎(少飛15期)

昭和20・5・26沖繩特攻戦死(行年十九歳)

○故陸軍軍曹 勲七等功六級 太田 巖(静岡県)

翔雲院忠巖鷲見居士(行年十九歳)(少飛15期)

昭和20・5・26知覧飛行場外ニテ戦死

ちなみに私は20・4・3に北京特攻宿舎にて生

前に戒名を作ったのであるので、部下戦友と同じ用紙

に書き仏壇に納めてある。

故陸軍大尉正七位勲五等功三級 窪川次郎

翔空院飛燕敏鷲居士(特操一期・山梨師範卒)

昭和20・5・26沖繩特攻ニテ戦死(行年廿二歳)

今後死亡時は昭空院飛燕敏鷲居士、元陸軍中

尉、徒七位である。今夜も九英霊のために九つの

鉦を叩き香を手向けるのである。 合掌

(付記) 昭和54・2・10：33年の長年月かけて自

費出版した「学鷲・特攻の記録」大空は父なりし

かーB5版四四六頁より抜粋しました。千部

印刷、約三百部を遺族、靖國神社、国会図書館そ

の他へ寄贈し、戦友知人へも多く配布しました。

菊池会 (幹候九期)

仙台青葉城址護国神社にて慰霊祭

特攻戦死者三五名をはじめとし、戦死、殉職、物故一一九柱をまつる慰霊祭を、総会前に行うこととしている菊池会は、本年第八回総会を宮城蔵王コイヤルホテルにて開催するに先立ち仙台青葉城址内護国神社拝殿にて第五回慰霊祭を執行した。

ご遺族として、第百五振武隊林義則君許婚小栗楓子さん、誠第三十二飛行隊武克隊林一満君の兄林修作ご夫妻、妹林アイさん、飛行第二十戦隊猪股寛君の弟猪股孝ご夫妻、同じく飛行第二十戦隊木脇出身及川真輔君の姉及川清子さんはじめ一〇名、会員七六名が一九柱のみ霊に鎮魂の祈りを捧げた。特に巫女が舞う「鎮めの曲」には、ご遺族はじめ参列者の多くが涙をこぼせることができなかった。

巫女が舞ふ鎮めの曲に涙溢れ亡き友の顔頻りに浮かぶ

菊池会は卒業時二四六名、現在会員一一三名、今なお消息不明二八名がいる。

総会のために消息不明が減り、今回

も、三名の会員の増加を見た。慰霊祭を行うこと、消息不明者を皆無とすることが会設立の目的の一つでもある。

来年は神戸市 再来年は菊池教育隊のあった隈府(現菊池市)菊池神社にて慰霊祭を行い、在校時唯一の殉職事故である、佐久間一男見習士官、同乗助教坂本賢次曹長(少飛13期)の両名が墜落した熊本県鹿本郡菱形村轟一四一四の地点に、村民有志が建立したという慰霊碑に献花拝礼の計画を予定している。

写真は 奮場権弥宣と参加者

(文責 岩田辰夫)



操幹一期会

発足す

「特別攻撃隊」陸軍の部によれば、幹部候補生出身の戦死者は一〇四名、いづれも各兵科からの航空転科であり、その総人員は、基本学校別に、太刀洗四〇名、宇都宮一八〇名、熊谷三〇名、(仙台二〇名)、合計一、〇八〇名、

幹候七、八、九期の昭和18年11月1日、七、八期の一部が翌19年2月に転科した。

平成3年4月20日、市ヶ谷全陸軍航空部隊碑、碑前祭の実行委員を幹候出身者が担当する事となり、俄かに団結の機運を生じ、実行委員担当六〇名、式典参加四〇名、会員加入六〇名、計一六〇名(名)の幹候出身者が把握された。実際の名簿把握は六〇〇名にも及んだが、その中の三割が碑前祭に直接、間接に参加した形となった。

せっかくの幹候の結果を一度だけで離散させてしまうのは惜しいという要望により、幹候会創立総会を11月1日夜グランドヒル市ヶ谷翡翠の間にて、開催した。

集まる者三六名。

幹候会の名称を「操幹一期会」とした由来は、幹候操縦をつめて操幹とし

一期とした所以は、七、八、九期の一期一回のみの転科で、二期三期がないところから一期一会の一期とした。

創立総会は首都圏近郊の在住者中心に呼びかけるにとどめたが、更に幹候一本化の会に相応しく、全国的な組織とすべく、毎年11月1日と日時を固定し、場所もグランドヒル市ヶ谷と定め、参加者の拡大につとめる事とした。

(文責 事務局担当 岩田)

